

令和7年度人生100年時代づくり・地域創生ソフト事業総括

1 事業の名称

患者の尊厳と安全安心な療養環境を両立する飛騨市民病院身体拘束抑制プロジェクト

2 事業の目的

高齢化率が47%を超える飛騨市神岡町の医療現場では、入院中の高齢者の多くが夜間せん妄を抱えており、単独離床による転倒事故のリスクが顕在化している。そのため、職員が手薄となる夜勤帯のスタッフの心労は計り知れず、身体拘束に頼らざるを得ない現場の実情も否定できない。しかしながら、令和6年度の診療報酬改定では『身体的拘束を最小化する取組の強化』が明記され、組織的な体制整備が求められたことから、院内の認知症・せん妄チームが中心となり『患者見守り装置による安心安全な療養環境の実現』のための実証実験を実施することで、患者の尊厳を尊重しつつ転倒事故を防止し、高齢社会対策大綱に示された『人生の最終段階における医療・ケアの体制整備』を推進する。

3 実施方法

- 1 認知症・せん妄チームにてプロジェクトを始動。
- 2 認知症看護認定看護師を招いて身体拘束最小化を目指す全体学習会を開催し、院内全体の取り組みとしての気運を高める。
- 3 実証実験前に病棟スタッフに対して患者見守り装置の設置・操作方法のレクチャーを実施し、正しい運用方法を身につける。
- 4 60床分の患者見守り装置にて運用開始。
- 5 装置の示すデータと患者の実態の実証確認及び導入後の身体拘束実施率の変化の記録保存。
目標値：R6.11の身体拘束実施率15.0%をR7.12時点で一桁台見守り装置のさらなる活用について学習。
- 6 患者・職員満足度調査により看護等に対する満足度の前年度比を確認。
- 7 活用支援サポートによる実験の検証と今後の継続の検討。
- 8 認知症看護認定看護師を招いて身体拘束最小化を目指す全体学習会を開催して、それまでの取り組みの成果を報告。
- 9 事業期間終了後は、⑦の検討結果次第で自己負担により継続。

4 事業内容及び実施状況

4 月 身体拘束最小化チーム発足

認知症・せん妄チームにてプロジェクトを始動

5 月 身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10%以下 全体 14.5%

6 月 患者見守り装置リース、実証実験開始

実証実験前に病棟スタッフに対して患者見守り装置の設置・操作方法の
レクチャーを実施し、正しい運用方法を身につける。

60 床分の患者見守り装置にて運用開始

身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10%以下 全体 9.4%

7 月 身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10%以下 全体 7.4%

8 月 身体拘束最小化研修

認知症看護認定看護師を招いて身体拘束最小化を目指す全体学習会を
開催し、院内全体の取り組みとしての気運を高める。

身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10%以下 全体 1.3%

9 月 身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10%以下 全体 2.4%

10 月 身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10% 全体 3.6%

11 月 国保医療学会発表

これまでの取組成果を国保学会にて発表

身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10%以下 全体 3.8%

12 月 患者・職員満足度調査

入院患者に対して満足度調査を実施

身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10%以下 全体 2.7%

1 月 身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

目標 10%以下 全体 7%

2 月 身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック（予定）

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

3 月 身体拘束最小化チーム及びラウンドチェック（予定）

身体拘束実施率の把握及び日常的ケアのモニタリング

5 事業の効果

患者見守り装置をリースすることで、身体拘束実施率の目標値を大きく上回る数値を出すことができた。患者の尊厳を尊重しつつ転倒事故を防止し、高齢社会対策大綱に示された『人生の最終段階における医療・ケアの体制整備』を推進し、患者見守り装置による安心安全な療養環境の実現を実施できた。

6 その他（感想等）

患者の尊厳を尊重しつつ転倒事故を防止し、高齢社会対策大綱に示された『人生の最終段階における医療・ケアの体制整備』という当初の目的を達成するにあたり、公益社団法人地域社会振興財団よりこのような素晴らしい参加の機会をいただきましたことを、厚く御礼申し上げます。

眠りスキャン使用後アンケート

良いと思った事

【看護師】

- ・見える化によって、眠っているか覚醒しているかが一目で分かる
- ・色やピクトグラムによって状況が分かり易い
- ・アラームのタイミングが個別設定できる
- ・夜勤中の巡視回数が減った
- ・心拍や呼吸がみられるので安心
- ・予期せぬ事態に備えられる
- ・設置が簡単
- ・センサーの時間帯を設定できる
- ・起き上がりでキャッチできる
- ・一括管理できる
- ・離床した際にアラームが鳴るため、すぐに見に行くことができた
- ・センサーマットや転倒ムシを設置しなくても離床や睡眠状況が把握できて良かった
- ・患者の状態が一目で分かり、観察できるので良い
- ・ベッドでどのようにしているかがわかり良い。息をしているかなどの生命判断になって

ありがたい

・ベッド上で身体を起こしただけの体動が分かる、不穩の前段階を体動のタイミングで早くに察知し対応できること

- ・状態が心配な患者の心拍が確認できる
- ・アラームで訪室するとちょうど動き出したところですぐに車椅子に移乗させるなどの対応ができた
- ・体動が分かる

【介護福祉士】

- ・正確に反応が出たときはすぐに訪室できるので患者さんの様子や訴えが分かる
- ・動きたい、物を取りたいなど転倒転落の予防になり行動を憶測できるため安心
- ・転倒転落などのインシデントが未然に防げる
- ・スタッフステーションにいるときは気づくのが早いですが、病室にいるとわかりにくいのでPHSなどに繋げることができればもっと便利になると思う

【看護補助者】

- ・気にかける事が増えた
- ・ステーション一括で管理することにより、訪室する回数が減った事
- ・安心感がある
- ・寝ている状態と起きている状態が分かるので良い

工夫や注意が必要だと思ったこと

【看護師】

- ・患者の下に敷くセンサーの位置は正確に設置すること
- ・Wi-Fiが乱れる時がある
- ・ベッドサイドにいる時にもキャッチしたいので、ナースコールと連動させたい
- ・Wi-Fiトラブル時使えなくて困った
- ・ギャッジアップしているとセンサーから外れて使えないことがあった（センサーが小さい）
- ・破損することは無いかもしれないが、カバーや機械を保護する物があったら良い
- ・設置の場所→キャッチできるかの確認
- ・時間差があるためアラームが鳴ったらすぐに対応する事が必要
- ・位置によって作動に誤差があるため、確認が必要
- ・アラームの設定（時間）・音量
- ・起き上がりで鳴るのか離床で鳴るのか等の設定
- ・アラームが鳴っても離れている場合確認しに戻らないといけないのが時間のロス
- ・離床の音に気付かない時がある 離床や起き上がりの度に部屋に行って確認すると忙しい
- ・体動を察知しても対応しなければ意味がないこと
- ・トラブル発生時の対応マニュアルがあると良い（使用中にあった画面がいきなり

変わった時のことなど）

【介護福祉士】

・反応がないときに訪室すると座位になっていたり、眠っているはずなのに起きて書き物をして
いることがあり、全患者さん全てが眠りスキャンに頼ることは当てはまらないと感じます。

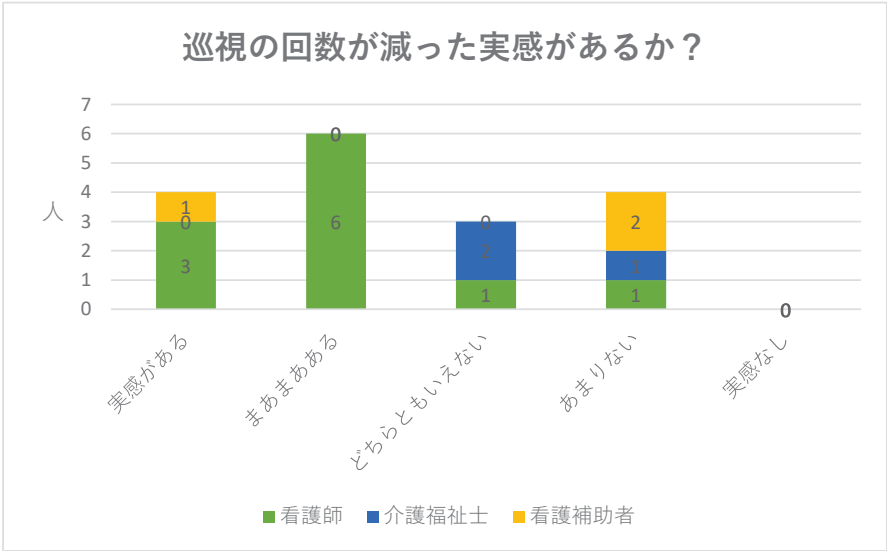
眠りスキャン関係なく訪室が必要と思いました。

- ・少しのベッドからのアップで反応するため、時々焦って見に行ってしまう。
- ・スタッフステーションにいるときは気づくのが早いですが、病室にいるとわかり惜いので、
PHSなどと繋げることができればもっと便利になると思う
- ・機械に頼り過ぎない

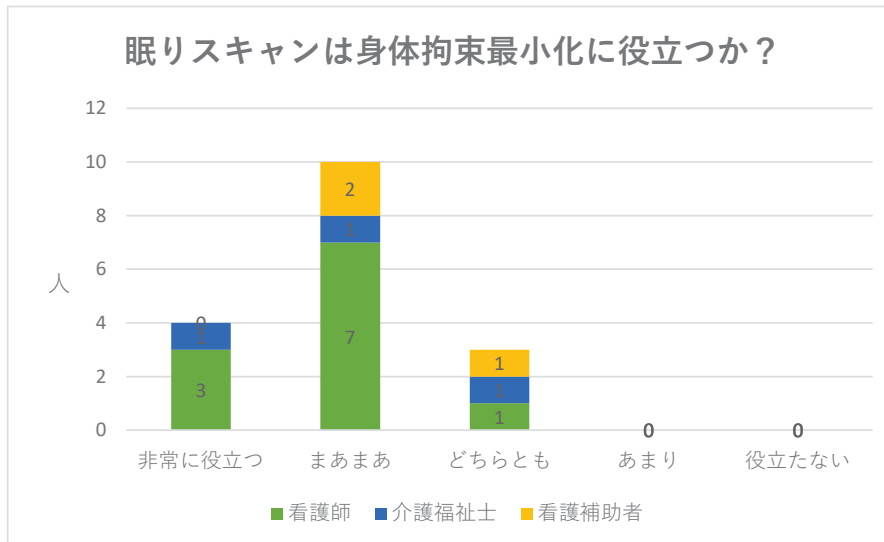
【看護補助者】

- ・画面やアラームを信じ過ぎず、参考程度にするよう意識すること
- ・モニターを使用していても、自分で確かめる必要がある

実際に巡視の回数が減った実感があるか？



身体拘束最小化に役立つか？



その理由

【非常に役立つ】

- ・ 患者本人に不快な思いをさせることなく行動監視ができる（看）
- ・ 患者にもよるが、個々のアラーム設定をしっかりとできれば転倒・転落の前段階でキャッチができる（看）
- ・ 患者の離床を素早く察知して、いち早く患者のもとに行けるため（看）
- ・ 拘束をしなくても早期に危険を察知すれば、せん妄発生の予防、転倒・転落などの事故の予防ができる（看）

【まあまあ役立つ】

- ・ 離床センサーになるため（看）
- ・ 起き上がりがキャッチできる（看）
- ・ 自己抜去やおむつ構いの予防はできない
- ・ 離床によりアラームが鳴るが信用しすぎてもいけないため（看）
- ・ たまに起きているのに反応しなかったりなど（看）
- ・ 起き上がり等みられるのはとてもいい（看）
- ・ センサーマットが鳴る前にキャッチできる（看）
- ・ 足元のセンサーは分かる人は避けて立ち上がるが、眠りスキャンなら転倒・転落は予防できる（介）
- ・ 柵を常に3点にできる（介）
- ・ すぐに患者の状態を見に行ける（介）
- ・ 危険を未然に防げる（補）
- ・ 危険だと思う患者を観察できるので良いと思う
- ・ 実際にアラームが鳴って行くと端座位になっていた事があった（転倒ムシは反応なかった）

【どちらともいえない】

- ・ 役にたつとは思うが、半分は反応ないことがあるので（介）

